

土岐善麿短歌賞

連作の部

【佳作】

「社会の保健室」

秀嶋 瑞季

予備校の裏の裏のキッス エックスデーならいまここだ

はつなつの手汗にお化けタップが字をはなつ 『ぼくは いまだに。』

青春コンプの水際作戦 フリック入力もままならない季節の

僕たちはどうしようもなく十七歳で本棚には漫画ばかり並んでいた

一瞥はスーパードヴァ だから好きの連続でここまでやってきた

盛れてない自撮りだつて捨てちまう前に僕宛に送ってくれよ！

廊下には運命の糸が赤外線センサー セブテンバー、文化祭まであと

六本の弦が琴線になるピックを落とす おれ、ダンシング・イン・ザ・虚飾

行住坐臥＋恋 むしゃぶるい 授業科目がすべてきみになる

教室のフロントマンだったたいしてギターも弾けないくせにたまらなく好きだった

君の眠る保健室 パーテーションに濾過されるひかりが唇に落っこちる

名前を入れ替えて歌うラブソングすべては文化祭の帰り道の話だ

（世界中のあらゆるものへそそがれる） まどかなるひかりと書いて援助交際

寝息のオールナイトニッポン延長戦へ朝日は血、燃える鎖骨の酸味

思い出は膿んだきずぐち 社会には僕らを治せる保健室はない

東京砂漠にS、O、S を書くように背中を撫でる世界はつづく

君と僕だけで世界が完成されてしまうなんてよくあることで 性春酸化